

岐阜縣太田橋起工式

二月二十一日、國道十四號線岐阜縣加茂郡古井村、可兒郡今渡町立會木會川に架設の太田橋起工式を舉げた。此日午前八時、同乗四人（上田知事伊藤内務省道路課長小坂内務屬、松尾土木課長）自動車を驅りて岐阜市玉屋旅館を後に爆音勇ましく式場に向ふ。市街を離れた各務原飛行場を右に見、やがて木曾川に出て川に沿ふて愈々奥深く分け入る。進むにつれて山は愈迫りて、千仞の絶壁、川皆岩碧にして、奥山の雪を解して清らかなる水此間を縫ひ、流を遮りて突兀として巖あり、實にや松青く水清らかに、岩石岬々として或は高く又低く、凹みては渦をなし或は逼りて瀧を爲す。これぞ近時曠に喧傳せらるるに至りし日本ラインの勝景である、今更にその幽淡清雅の風致に見惚れつゝ、行くこと半時、稍山開け人家檐を連ぬる所に出づ、道に綠門あり、編額に記して曰く祝大田橋起工式と、今正に加茂郡太田町に着したのである。直に休憩所に入り暫時準備の成るを待つ。やがて案内に隨ひ川畔の中之島嶺なる式場に臨む。知事以下縣當路者縣會議員關係兩郡長町村長新聞記者地方有志者等參列する者無慮數百

人、悉く喜色滿面に漲る。

抑も此處太田の渡は一千年の古き歴史を有し、古來木曾の棧橋、碓氷峠と相並びて仲仙道の三天難所として世に知られ、承久の亂には東西兩軍の相衝突せる古戰場であつた。今や仲仙道の幹線道路として交通上最も重要なものの一であるが、此の渡船の爲交通の便を阻まるゝや誠に久しきもので、往時は勿論此處十數年前までは、架橋を望むて已まなかつた。自動車天下に普く行き通ふ様になつても、此處ばかりには文明の月も照らず花も咲かず寧ろ昔ながらの風情を存するものとして自ら慰め諦められたるの感あつた程である、

渡船場は平日に於てすら今渡町より約六十尺の高低を紆紆急峻の渡船場道で不便なるに止まらず、河流急奔なるが爲些少の出水に遭遇するときは直に交通杜絶するの状態にあるのみならず右岸には鐵道高山線開通し左岸には一里弱にして私設東濃線廣見驛ありて中央線に聯絡の便がある、従つて來往は日一日と愈々繁激を加へ、架橋の必要を感ずること愈々切なるものあるに至つて、遂に地方人士の奮起となり、其の努力空しからずして、縣當局の具體的架橋計畫は確立し、政府當局を動かし、工事費三分の二の國庫補助を得て總額六十餘

萬圓の巨費を披じ、二星霜を費して延長九十餘間の大鐵橋を架することゝなつた。喜びなくして如何せん。木曾川の清き流れも喜び嘖き満山皆笑を湛るの感がある、號砲を合圖に一

同着席、照らず降らず、天は嚴かに装ひて午前十時といふに徐ろにそよく和風、笙の音と相和し、妙音薫するが如き中に式は始つた。修祓降神獻饌の儀型の如く行はれ、次で齋

主の地鎮起工の祝詞朗かに天空に響き渡り、爲に萬籟肅として草もゆるがが鳥も啼かず、折柄燦として天日雲間に漏れ、

天も嘉納ましませしと覺ゆ。大成期して待つべし。白衣の人嚴かなる蹶入の間に知事の式辭内務大臣の祝辭（伊藤内務省道路課長代讀）協賛會長縣會議長其他來賓多數の祝辭あり。

玉串奉奠徹饌昇神の義滯なく濟みて式終る。知事以下當路者と共に右岸の架橋地點に至り親しく實況を視る。此處も亦山紫水明、水は洋々として流れて止まず、眼下の渡船もやがて

影を潜め太田橋之に代りて鐵欄高く空際に横はるの時、人は文明の惠澤を歐歌し、名に負ひし太田の橋も世と共に忘れられ、水のみ千古變らず永久へに流れて盡きざるべし。されば

之が竣功の曉は昔日の不便茲に一掃せられて交通上の利便隔世の感があるう、技術の精巧と規模の宏壯とは自然の勝景と相俟つて其の偉觀や其の得意や蓋し想像の外にあるであらう

式後祝賀の宴に列る、心盡しの美酒佳肴等美しく配せられ、陽氣堂に滿つ恭しく將來の成功を祈りて杯を舉げ歡を盡して此處を辭し去つた。

因みに内務大臣の祝辭は左の通りである（小坂生記）

祝辭

國道十四號線太田橋架設準備成り茲ニ本日ヲ以テ起工ノ式典ヲ舉クルニ至レルハ邦家ノ爲洵ニ欣幸トスル所ナリ抑國道十四號線ハ帝國ノ中央幹線道路トシテ極メテ重要ナル地位ヲ占ムルニ拘ラス木曾川ニ橋梁ノ架設ナク纔ニ渡船ニ依リテ交通ノ連絡ヲ圖リタルカ如キ時運ノ進歩ニ伴ハサルヲ遺憾トセルヤ久シ今茲ニ架橋ノ計畫成リテ其ノ工ニ着手セムトス惟フニ本工事完成ノ曉ハ之ニ依リテ交通上ニ至大ノ效果ヲ齎スノミナラス地方ノ開發産業ノ發展ニ資スル所亦實ニ尠少ナラサルモノアラム冀クハ最善ノ努力ヲ以テ之カ完成ヲ期シ長ヘニ其ノ效果ヲ全フセムコトヲ一言ヲ述ヘテ祝辭トス

大正十三年二月二十一日

内務大臣 水野鍊太郎